

かぜ症状に利用される主な漢方薬



今月の登録販売者学習会のテーマは葛根湯エキス。そこで今回は6年前にある薬局さんで「かぜ症状」に利用される漢方薬の学習会をした時に作成した資料の紹介です。株式会社ツムラさんから提供された資料、寺澤捷年著「症例から学ぶ和漢診療学」、大塚敬節著「傷寒論解説」などの内容を組み合わせて私なりにまとめてみたものです。古い資料ですが漢方薬の基本的な概念は経年的にさほど変わらないと思っていますので温故知新もしくは復習の意味をこめて当時の資料の一部を訂正して紹介します。

1) かぜ症状の進行別漢方薬の選択

ツムラさんの資料に基づき、横方向にかぜ症状の進行状況を急性期、亜急性期、慢性・回復期としました。また縦方向は上から下に向かって実証から虚証としました(ただし虚証間の順序は明確ではありません)。さらに赤枠は陽証用、青枠は陰証用を意味しています。各進行期の説明は次頁のとおりです。

	急性期	亜急性期	慢性・回復期
実証	麻黄湯 (表実) 太陽病；自汗無；発汗力最強	小柴胡湯 (虚実間証) 少陽病；肝陽気過剰、胸脇苦満	
	葛根湯 (表実) 太陽病；自汗無；発汗力強		
	小青竜湯 (表実～表虚) 太陽病；自汗は無～有。水滯	柴胡桂枝湯 (虚証) 少陽病；胸脇苦満、表虚	
	麻黄附子細辛湯 (表寒、虚実間～虚証) 少陰病；水滯	麦門冬湯 (虚証) 少陽病；肺熱	
	桂枝湯 (表虚) 太陽病；自汗有；発汗力弱	補中益气湯 (虚証) 少陽病；気虚	
	香蘇散 (表虚、表仮寒証) 太陽病；自汗有；発汗力弱。気鬱	参蘇飲 (表虚) 太陽病；自汗有；発汗力弱。脾虚	
虚証			

①急性期：(内容の用語については文末の用語解説を参考にして下さい)

かぜのひき始めの頃になります。かぜの**邪気**が体の**正気**と**体の表面**で**攻防**をしている段階で、熱症候などの陽証を呈し、**太陽病**と呼ばれる時期です。治療の基本は**発汗により病邪を表から駆逐**(解表；ゲキョウ)する漢方薬が用いられます。感染症の初期症状すべてに有効とはされていませんが、発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、だるさなどのかぜの初期症状を改善します。

ここでは**麻黄附子細辛湯**のみ**陰証(少陰病)**用となっています。普段より気の衰えが顕著な人が対象で、かぜの**病邪が直ぐに体の内部**に入ってくる傾向があり、かつ体の抵抗力(正気)も弱いので反応して**発生する熱は弱い**ものの、その発熱対応の他に**体内を積極的に温め**正気を増やす必要があります。

②亜急性期：

急性期を過ぎて、風邪の**症状が長引いた時期**に相当します。傷寒論によれば小柴胡湯では風邪の引き始めから**5～6日**、柴胡桂枝湯では**6～7日**の頃とあります。病邪が表から半表半裏に侵入してきた時期で、**胃腸障害や咳き込み**などの症状も出てくるようになります。

陽証の第二段階である**少陽病**の時期に相当しますが、**参蘇飲**のみ**太陽病**(つまり表で病邪との攻防)の位置付けになっています。普段より脾に衰えがあり気虚の人が風邪にかかり症状は強くないが**軽い微熱や咳が残る**場合に利用されます。

③慢性・回復期：

かぜとの攻防で消耗した**気を補ったり**、**長引く咳症状を改善**する時期になります。亜急性期と同様に少陽病の時期に相当します。

【用語解説】(独特な表現が多いので簡単に解説を試みます。ほぼ五十音順)

陰証(病気にかかった時に体が示す寒性、非活動性の症状)、**肝腹部気鬱**(肝や腹部に気が停滞した状態でイライラ感、腹部膨満感などを呈する)、**肝陽気過剰**(五臓は陽気(気)と陰液(血水)のバランスで恒常性を保つが陽気が過剰になった状態で肝の場合はイライラや頭痛などを伴う)、**気**(目に見えない体を活動的にさせるエネルギーで体を巡る)、**気鬱**(気の流れの停滞状態で抑うつ、喉のへばりつき感、腹部膨満、四肢しびれなどを示す)、**気虚**(気の量が足りない状態で全身倦怠感、易疲労、内臓下垂などを示す)、**胸脇苦満**(左右の肋骨弓周辺を押すと抵抗があり患者は痛みを感じる病態で柴胡を主薬とする漢方薬の特徴)、**虚証**(体内の気血の勢いが弱く一般にひ弱な人、抵抗力の弱い人。実証と真逆な体質を現わす)、**虚実間証**(体質が実証と虚証の中間的な状態)、**血**(赤色の液体で体を巡り栄養・滋潤する)、**邪気**(病気のもつ勢い・エネルギー。病気の勢いが強いほど邪気は強い)、**実証**(体内の気血の勢いが強く一般に元気な人、抵抗力の強い人。体質を現わす)、**正気**(生体のもつ目には見えないエネルギー。ここでは抵抗力もしくは免疫力と考えてよい)、**少陰病**(陰証の第二段階で、病邪が半表半裏に侵入し、かつ体の抵抗力が弱くなり病邪の勢いに押された状態)、**少陽病**(陽証の第二段階で病邪が半表半裏に侵入した状態)、**水**(透明の液体で体を巡り滋潤する)、**水滯**(水の巡りが体の一部で停滞した病態でむくみ、下痢、頻尿、水様性鼻汁などの症状を呈する)、**太陽病**(病邪が表に取り付いた時の症状で陽証の第1段階)、**肺熱**(五臓の一つ肺に熱をもった状態で粘性の痰、喉の乾燥、乾性の咳などの症状を示す)、**脾虚**(脾は五臓の一つで消化機能を司る。脾の機能が衰弱した状態で食欲低下、消化不良から気血の不足につながる)、**表**(病邪が侵入している部位を現わし体の表面を意味する。体の部位は奥に行くに従い、半表半裏、裏と呼ばれる)、**表寒**(表の寒性症状が強い場合で表虚ににる)、**表仮寒証**(発熱前の寒気を感じる状態で本当の寒性症状ではないという意味)、**表虚**(表の虚証で体表面の気血の力が弱く、病邪の侵入の際、表の締めまりが悪くしっとり汗を出す。これを(自汗という)、**表実**(体表面の気血の力が充実。自汗を伴わない)、**病邪**(病気を発生させる原因・要因)、**陽証**(病気にかかった時に体が示す熱性、活動性の症状)。

次表に各漢方薬の構成生薬●(ツムラ製品による)とその作用を示しておきました。

漢方薬 生薬	麻黄湯	葛根湯	桂枝湯	小青竜湯	辛湯 麻黄附子細	香蘇散	小柴胡湯	柴胡桂枝湯	参蘇飲	竹茹温胆湯	麦門冬湯	補中益気湯	生薬の主な作用
杏仁	●												鎮咳去痰
麻黄	●	●		●	●								発汗作用、鎮咳、エフェドリン含有
桂皮	●	●	●	●				●					発汗補助、血管拡張、気巡り回善
甘草	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	消炎(グリチルリチン)、補脾、諸薬調整
葛根		●							●				解熱、滋潤作用(筋緊張緩和)
大棗		●	●				●	●	●		●	●	脾助け滋潤栄養。神経の落ち着き
芍薬		●	●	●				●					駆瘀血、鎮痙、過度発汗防止
生姜		●	●			●	●	●	●	●		●	軽度発汗、補脾益気、鎮嘔、鎮咳
半夏				●			●	●	●	●	●		鎮咳、去痰。心下水滯除く。理気
乾姜				●									体内を温め呼吸能強める。
五味子				●									鎮咳、去痰。肺機能改善、生津
細辛				●	●								発汗・解熱、肺温め鎮咳
附子					●								体を温め、鎮痛
香附子						●				●			理気作用(腹症状改善)、鎮痛
蘇葉						●			●				理気作用、発汗・解熱、解毒
陳皮						●			●	●		●	理気作用、去痰
柴胡							●	●		●		●	清熱(消炎・解熱)、肝気滞去る
黄芩							●	●					清熱(消炎・解熱)、肝気滞去る
人参							●	●	●	●	●	●	脾助け気益す。生津。滋潤栄養
前胡									●				去風熱(発汗・解熱)、肺熱時去痰
茯苓									●	●			余剰水を除く。鎮静作用
桔梗									●	●			肺熱冷まし、鎮咳・去痰。整腸

漢方薬 生薬	麻黄湯	葛根湯	桂枝湯	小青竜湯	辛湯	麻黄附子細辛湯	香蘇散	小柴胡湯	柴胡桂枝湯	参蘇飲	竹茹温胆湯	麦門冬湯	補中益気湯	生薬の主な作用	
枳実										●	●			理気作用(腹部膨満・腹痛改善)	
麦門冬												●		生津で滋潤(咳、粘痰、口渇治す)	
黄連											●			清熱(消炎・解熱)、肝気過剰抑制	
竹茹											●			肺熱時清熱・去痰、胃熱時の鎮嘔	
粳米												●		脾補い気益す。生津。滋潤栄養。	
黄耆													●	脾補い気益す。止汗、利水。	
蒼朮													●	脾補い気益すく過剰水を去る。	
当帰													●	血補い巡らす。滋潤、鎮痛。緩下	
升麻													●	消炎・解熱。気を益し内臓筋増強	
漢方薬の対象となる主な症状(証)	表実(自汗無)。発汗作用強力。インフルエンザウイルスにも効果。	表実(自汗無)。項背強ばり。発汗作用強い。	表虚(自汗有)・しつとり汗ばむ。脾衰え。気逆(のぼせ、頭痛)。発汗作用弱い。	表虚(自汗有)や表実(自汗無)。脾が寒に侵され(少陽病の要素)、水滯症状(水様鼻汁、水様痰)	表証(悪寒など)を伴う陰証第二ステージ。発熱弱いが悪寒強い。平素より気虚。水様鼻汁。	表虚(自汗有)。脾気鬱(腹部膨満、悪心、嘔吐等)、不安、不眠、抑うつ気分伴う事多い。	脾胃に衰え。往来寒熱。	かぜ(傷寒)罹患5〜6日経過もすつきりしない。脾胃に衰え。往来寒熱。	かぜ罹患6〜7日経過もすつきりせず胸脇苦満・脾胃衰えに表証(発熱、関節痛)が併存。	表虚(自汗有)。平素より気虚(胃腸虚弱)、感冒罹患後数日たっても表証が取れない場合。	咳・痰・微熱、イライラ、不眠、腹部膨満。	肝と腹部に気鬱、肺熱。気陰虚。風邪等罹患後も	肺熱、気道乾燥(粘稠痰、発作性咳)。脾胃陰虚(陰液不足に伴う口渇、しゃっくり、便秘)	いつまでも寝ていたい等の症状。	<p>【用語解説】</p> <p>往来寒熱：熱症状が収まると悪寒が強くなり、それが去ると再び熱症状。それが繰り返す。</p> <p>理気：停滞する気を巡らす作用。</p> <p>瘀血(オカ)：血が滞った病態。</p>

※詳細は前出の寺澤捷年著書などをご覧ください。

(おわり)